

空

平成28年5月10日発行

第14巻2号

通巻第66号

空



2016・4・5

**SORA** 66号

福岡 田代貞枝

僧ひとり冬の光を掃き集む  
冬麗や汽笛大きく出航す  
身をよぢり鯉掬はるる花の昼  
神苑の鳩にまぎれて恋雀  
月命日僧もしげぐ携客

熊本 松田明子

火熨斗さへ桐の御紋の雛道具  
緋の色の筥に押しあふ豆雛  
どう見ても洛中囃らし雛屏風  
輿入れに付き添ふ京の雛人形  
桃の日や歩いてめぐる城下町

大阪 青木朋子

顔見世や托鉢僧の橋に立つ  
実南天一粒つつの雪の嵩  
初みくじ吾子の真顔の緩みけり  
マスクして己れの息を反芻す  
家ぬちの耳みな尖る吹雪の夜

福岡 樋口みのぶ

春立つや大地にかへす野菜屑  
もう一度教室のぞき卒業す  
露天湯の奥は真闇よ冬銀河  
闇に目の慣れてこぶしの花盛り  
神棚は見上ぐる高さ桃の花

糸田 宮井 知英

老梅の皮一枚の力かな

求めぬと決めて幸せ桜草

伐り過ぎし枝の調ふ弥生かな

時に竹爆ぜる音ある野焼かな

祖の森は出城跡なり草萌ゆる

岡垣 田中とし江

水槽の底の元旦大海鼠

いつせいに山河拝む初日かな

商ひは味噌醤油のみ雛飾り

酒蔵の梁につばめのくるころよ

春泥や道交はればなほ光る

福岡 亀井 紀子

落人のごとき面なり恋の猫

子燕のそれぞれ違ふ方を見て

父母の看取り解かれし春の月

傷のある苔も咲きて白木蓮

春水にしたがふやうに歩きけり

粕屋 秋 千 晴

派出所も火の用心の赤き幕

真向ひの火事に妊婦を庇ひたり

真つ先に屋号を外す火事騒ぎ

火事の跡ひそひそ話固まれり

蹲踞の柄杓蹴散らす恋の猫

福岡 矢野百合子

初鏡かはらぬ顔を佳しとして  
松過ぎの身を持って余し海を見に  
春の雪積もることなく降りしきる  
異国語も混じる二の丸梅盛り  
種袋振りて聞ゆる母の声

兵庫 石川 叔子

三日はや仏に湯気のとつものを  
射止めたる者を真中に牡丹鍋  
鴨群れて園児の列の騒立てり  
福は内家中探す福の神  
たんぽぽや根締のごとく樹を囲み

福岡 西住三恵子

素魚の生寶へまとも頭突きせり  
測り枘の大小並ぶ素魚小屋  
菜の花に屈むは花に浸るごと  
二合の米二人で三日かの子の忌  
梅東風や難聴といふ祈りあり

京都 天谷 翔子

ふくろふの夢を覗きに行かないか  
凍瀧に閉ぢ込められし赤き紐  
少年や恋のはじめの雪つぶて  
塗盆にちちははと子や雪うさぎ  
日の差して音の湧きくる冬泉

東京 古川 夏子

狐火や白湯一杯の酔ひ醒まし  
雨もよひ山裾しろむ仏生会  
尼寺の春耕を待つ畝ひとつ  
間のありて落ちし椿の重さかな  
春の潮高鳴り駒の疾走す

北海道 押田 裕見子

身の幅の足湯を固め氷落し<sup>すが</sup>  
折鶴を手に遊ばせて春着の子  
豆打つも身の内にまだ鬼のをり  
雪眼鏡苦手な人を遠くせり  
水揚げの魚をかすむる尾白鷺

福岡 白水 良子

聖堂の階のくぼみや日脚伸ぶ  
オキザリス聖者の歩きさうな町  
囀や街の真中は大聖堂  
花ミモザみやげ屋尽きて石だたみ  
一個づつ押しただきし染卵

福岡 吉村 摂護

舟島の流れが止まる春の雷  
休火山死火山も無き春の山  
啓蟄やトンネルは口開けしまま  
耳鳴りも永年の友風薫る  
送迎春春一番に襲はるる

兵庫 岩井京子

まんさくの黄を確かめに遠まはり

春の苑土ふつくらとほどこされ

温む川わが名づけたる鯉は来ず

レポートの提出焦る春の夢

花鋏鳴らしたるのみ成木責

大阪 井上和子

極月や漬物石を一つたす

紀の国のここに木の神冬の鴟

十二月ゴム毬波を弾まする

大枯野出て行く舟の權軋む

納経帳入れて小春の樞かな

山梨 野畑さゆり

立春の卵立ちたる佳き日かな

うららかやローマの古地図掘げをり

海鳴りの音きこえくる新若布

大渦に船のかたむく春の潮

春泥の靴並びをり保育園

東京 今井春生

空つぽのシューウィンドーに二月の陽

山菜莢の黄にけぶりたる下界かな

猫が飲む防火用水春の昼

啓蟄やボールのゆるき放物線

囀の一樹となりて暮れ残る

東京 遠山のり子

富士山の雪の輝く日和かな

岩肌の荒き谷川探梅行

くさ原に小犬ころげて春の午後

春一番童謡流るる山の駅

川上の煙るは木々の芽吹きとも

兵庫 森 俊 人

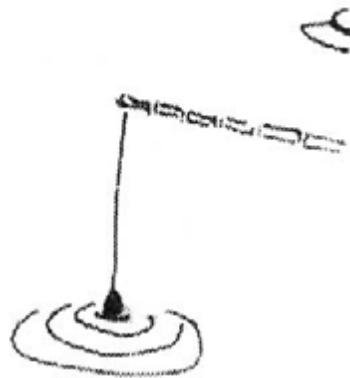
寒々と古墳の上の昼の月

切干や漁家のどの家も猫がをり

病む人へ寒月光のとどきけり

六つまで妻には見ゆる寒昂

百千鳥海境を航く巨船かな



空作品抄  
柴田佐知子抽出

蜂の巣を見つけ小声となりにけり

高倉和子

お日様とチューリップ描き日本の子

山内碧

無防備な足湯のうしる山笑ふ

岸洋子

水浅き方より氷張りにけり

石橋幾代

日日細る母の手足や雪しまく

押田裕見子

袂ある形見ばかりや烏雲に

深川淑枝







鶯替へしをとこの声の佳かりけり

火の星も氷の星も春の星

混み合うてゐてしづかなる蝌蚪の水

水仙や仏間は思ひ出すところ

宿坊に隙間の多し根深汁

病む夫は良き夫となり夕ざくら

うぐひすや畝に起点と終点と

母郷いま雪解雫の音の中

春昼の航くとも見えぬ貨物船

雪しまき捨て置かれたるこちして

マラソンの横一列になだれ込む

臥す姉の眼もてもの云ふ夕ざくら

寝ころびて雲を愉しむクローバー

天谷翔子

宮井知英

戸栗末廣

曾根富久恵

吉田 菫

吉田悦子

原 友子

角野良生

永淵恵子

河原敬子

織田高暢

石川叔子

中田みなみ

畳まれし大蛇息づく里神楽

老いたれば二人とも鬼豆を撒く

骨格のしかと末黒の阿蘇五岳

サイレンの固まり過ぐ暮の宵

平仮名でゆきと書きたし春の雪

湯巡りのタオルの凍ててしまひけり

霾やなめらかに発つ霊柩車

木蓮や時に子宮に戻したく

草餅や母の話は戦後へと

建国の日や幾層も海の色

網元の土間の広さやつばめ来る

湯ざめして丑三つ時の皿洗ひ

路地奥に蛇祀らるる猫の恋

松田明子

白水良子

千波悠

田代貞枝

山田正子

苑実耶

林徹也

仲里奈央

小林朱夏

えとう樹里

柴田志津子

栗原京子

今井春生



言問ふ如く紅梅は蕊を張る

青き鳥入れて散り初む梅の花

喪の列にはるかぜ厚み増して過ぐ

消防車揃ひ野焼きの火の手あぐ

廃校に日差したつぷり帰り花

朝陽いま染めゆく空を春の雪

紅梅や茶の間あふるるご近所さん

貼りかへし障子を開けて遺影見る

春塵を拭く早朝の身の軽し

寺まゐりによき歳となる彼岸かな

冴返る駅のホームに富士を見て

裏日本と呼ぶるる故郷春浅し

門までの徑に揺るるクリスマスローズ

田代民子

西住三恵子

乾 有杏

野畑さゆり

田坂能雄

青木朋子

田口萬智子

田中とし江

岩井京子

立花 一枝

遠山のり子

わたなべ漣

村上二三

広縁の無き家ばかり日脚延ぶ

あつあつの焼藪届く巫女溜り

水滴の次の音待つ春隣

病む人へ朝日はとどく露の臺

明王の岩を抜け出す花のころ

紅梅に横から下から鳥の来る

持ち帰りゆつくり開く福袋

初日浴ぶ地球に生れし人として

屋根の間に日輪見ゆる明の春

裸木や音をたてず鳥動く

手櫛にてちよつとそこまで春隣

薄氷を割つて孤舟の滄を汲む

耕しの終りは昼の月見上げ

小島翠波

井上和子

古川夏子

森俊人

山本則男

横田敬子

三輪敏夫

窪みち子

清水量子

本多トミ

田岡千章

桐山甫

増田ハルエ



海の上に橋横たはる初景色

古りてなほ美女のままなる雛の壇

体ごとふらここ雲に入りゆく

田の主の大岩に座す青蛙

じやんけんで母さんの役水温む

調律の終はりしピアノノ百千鳥

豆撒きの鬼役募集幼稚園

手土産の水仙の香のバスに満つ

春立つや口紅の色替ふる朝

片栗や鴨飛び去りし沼の色

受験生よろづの神を提げて

水うつやバケツの蛙はそつと置き

老人を映して水の温みけり

岡村尚子

日高孝

あさなが捷

吉村摂護

田邊豊子

小谷一夫

秋千晴

村上典子

荻悠子

田中素直

山口弘子

ふじの茜

森真二

# 空作品評

柴田佐知子

無防備な足湯のうしろ山笑ふ

岸 洋子

蜂の巣を見つけ小声となりにけり 高倉 和子

和子さんから畑に出たご両親がスズメバチに追われ怖い思いをされたと聞いたことがある。私も刺された経験が何度かあり、庭で巣を見つけたら小さいうちに落としている。〈小声となりにけり〉と声だけに焦点を絞って詠まれているが「蜂を刺激しないようにそつと動く様子や表情までも見えて来る。作意のない素直な詠みぶりだ。蜂の危険性も十分伝わってくる。

お日様とチューリップ描き日本の子 山内 碧

「太陽」と〈チューリップ〉と「子供」…誰もが思いついたって常識的な組合せである。ところが下五の〈日本の子〉によつてこの常識的な内容が鮮やかに大化けした。誰でもが思いつく言葉の組合せだど句会で一蹴されることもあるが、掲向のように〈日本の子〉という堂々たる座五によつて、このような作品に変貌することもあるのだから面白い。

〈無防備〉という素っ気ない言葉の印象が、読み進むとやわらかに変貌してゆく。〈足湯〉を使つた佳句には、なかなか出合えないのだが、この句は淡々と詠まれたことで、さりげない味わいが醸されている。

水仙や仏間は思ひ出すところ 曾根富久恵

〈仏間〉という空間を〈思ひ出すところ〉と言い切つた印象鮮明な作品。〈仏間〉という空間に座したときの心の姿がかくも端的に表現できるのかと、感心した。上五の凜とした香りを放つ〈水仙や〉という季語と切字も的確。

病む夫は良き夫となり夕ざくら 吉田 悦子

それまでは結構亭主関白な旦那様だったのかもしれない。病気をされて少し気が弱くなられたのだらうか。〈良き夫となり〉に少し淋しさを感ずる。配された〈夕ざくら〉によつて〈病む夫〉へのやさしい眼差しを感じる。

# 空集

柴田佐知子選



お日様とチューリップ描き日本の子

福岡 山内 碧

継ぎ接ぎの舗道の工事山笑ふ

ふらここに二人乗りして彼の世まで

夢の世を行くごと真夜の雪明り

身を正し夫より屠蘇を受けにけり

母逝きてより顔見せぬ嫁が君

無防備な足湯のうしろ山笑ふ

福岡 岸 洋子

置きざりの皮手袋に狙はるる

風呼びて野焼の炎走り出す

蝉梅の鉄の音にこぼれけり

消すよりも灯すがさびし春の宵

寒紅梅ひらくほど空青みけり

海際へ広げどんどの後始末

直方 石橋幾代

水浅き方より氷張りにけり

海鼠噛み顎が大きくなりにけり

雪三日力を抜きて過ごしけり

酒蔵の土間の湿りや雛祭

蜂の巣を見つけ小声となりにけり

玻璃ごしの山は美し卒業す

母の好きな花の種より蒔きにけり

焦点の合はぬ話や新社員

大きめの制服を着て青き踏む